

サルデーニャ語ログドーロ方言における 母音間閉鎖音の弱化について

— chain shift の観点から —

金澤 雄介

1 序論

サルデーニャ語ログドーロ方言 (logudorese)¹ の通時的音変化の 1 つとして、いわゆる西ロマンス諸語²と同様、母音間閉鎖音の弱化現象がある。

本稿では、ラテン語から現代ログドーロ方言への変化の過程において、母音間閉鎖音がどのように現れるかを観察し、その弱化プロセスについて考察する。考察の方法として、ラテン語から現代ログドーロ方言にいたるまでの母音間閉鎖音の弱化プロセスを、閉鎖音体系に生じた chain shift ととらえて議論を進める。そのうえで、サルデーニャ語ログドーロ方言における母音間閉鎖音の弱化プロセスが、どのような chain shift に基づいて生じたかを考察する。同時に、ログドーロ方言における無声閉鎖重子音

¹ サルデーニャ語は、イタリア共和国サルデーニャ島で話されるロマンス諸語の 1 つである。サルデーニャ語にはいくつかの方言が存在する。ログドーロ方言は、島の中央部および北部で話される方言である。

一方、島南部ではカンピダーノ方言 (campidanese) が話される。この方言にも母音間閉鎖音の弱化現象が見られるが、ログドーロ方言よりも弱化が生じた時期が早いことがわかっている。カンピダーノ方言における母音間閉鎖音の通時的変化については、金澤 (2006) を参照。

² Wartburg (1971: 29-44) は、ロマンス諸語を東西 2 つのグループに分類した。イタリア語、ルーマニア語などの東ロマンス諸語と、スペイン語、フランス語、ポルトガル語などの西ロマンス諸語である。この分類の基準は、母音間閉鎖音の弱化の有無 (cfr. 2. 1), あるいは語末の s の保存/消失である (lat. TRES > sp. tres, fr. trois, it. tre 「3」, lat. CANTAS > sp. cantas, fr. chantes, it. canti [ind.pres.2sg.] 「歌う」)。一方、サルデーニャ語諸方言では語末の s は保存されているかたわら (log.mod. trèss, kántas), 島中央部の東側で話されるヌーオロ方言では、母音間閉鎖音の弱化は部分的にしか見られないという点 (cfr. 3. 3. 4) で、東西どちらのグループにも属さない言語であるとみなされている。

は chain shift に関与しておらず、西ロマンス諸語における chain shift とは異なる性質を見せることを示す。また本稿では、古ログドローロ方言については、12 ～ 13 世紀頃の文献史料である *Condaghe di San Nicola di Trullas* に実際に現れる形式に基づいた分析を行う (cfr. 2. 4)。

2 先行研究

2. 1 扱う現象

本節では導入として、西ロマンス諸語の 1 つであるスペイン語に観察される母音間閉鎖音の弱化現象を具体例とともに示す³。対照のために、弱化が生じないイタリア語の例を併記する⁴；

lat. -D- > sp. -[ð]- (> -φ-) / it. -D-

lat.	sp.	it.	
CABALLUM	ca[β]allo	caballo	「馬」
NIDUM	ni[ð]o	nido	「巢」
PLAGA	lla[ɣ]a	piaga	「傷」
RIVUM	río	(同源語なし)	「川」
RADICEM	raíz	radice	「根」
LEGALEM	leal	legale	「法的な」

lat. -T- > sp. -D- (> -[ð]-) / it. -T-

lat.	sp.	it.	
LUPUM	lo[β]o	lupo	「狼」
ROTA	rue[ð]a	ruota	「車輪」
FOCUM	fue[ɣ]o	fuoco	「火」

³ 以下本稿では、[ð], D, T, TT はそれぞれ、有声摩擦音、有声閉鎖音、無声閉鎖音、無声閉鎖重子音を指す。

⁴ 母音 + 無声閉鎖音 + r の連続においても弱化は生じる；lat. APRILEM > sp. a[β]ril, log.mod. a[β]ríle 「4 月」、lat. MATREM > sp. ma[ð]re, log.mod. màðre 「母親」、lat. LACRIMA > sp. la[ɣ]rima, láyrima 「涙」。しかしながら、サルデーニャ語あるいは西ロマンス諸語全体を見てもこのような例はわずかであるので、本稿では考察の対象から除外する。

lat. -TT- > sp. -T- / it. -TT-

lat.	sp.	it.	
CUPPA	copa	coppa	「コップ」
CATTUM	gato	gatto	「猫」
BUCCA	boca	bocca	「口」

2. 2 push chain と drag chain

うえに述べた、西ロマンス諸語における母音間閉鎖音の弱化については、多くの研究が存在する。その大半に共通している点は、弱化を閉鎖音体系に生じた chain shift ととらえていることである。chain shift は push chain と drag chain の 2 種類に分類される (Campbell 2004: 47-52)。本節では、先行研究において母音間閉鎖音の弱化現象が push chain と drag chain それぞれの枠組みの中でどのように説明されているかを概観する。

Penny (2002: 74-76) は、スペイン語における母音間閉鎖音の弱化現象について、push chain に基づいた説明を提案している⁵。西ロマンス諸語の母音間閉鎖音の弱化プロセスを、push chain の枠組みの中でとらえると、次の 3 つの段階に分けられる；(I) 無声閉鎖重子音が単子音化する。(II) 二次的な無声閉鎖音と本来の無声閉鎖音の合流を避けるため、本来の無声閉鎖音が有声化する。(III) 二次的な有声閉鎖音と本来の有声閉鎖音の合流を避けるため、本来の有声閉鎖音が摩擦音化する。

push chain に基づいた母音間閉鎖音の弱化は、図 1 のように図式化することができる；

(図 1)

- (I) TT > T
 (II) T > D
 (III) D > [D]

⁵ Penny は push chain を主張する根拠として、子音連続の逆行同化にともなう二次的な無声閉鎖重子音の増加を挙げている。しかし、このような見かたには疑問が残る。イタリア語は、子音連続の逆行同化がもっとも頻繁に見られ、二次的な無声閉鎖重子音が多く存在するにもかかわらず、本来の無声閉鎖重子音を保存している。また、スペイン語では rs > ss, ps > ss, mn > nn のような逆行同化は生じたが、無声閉鎖重子音が生じるような同化は見られない。子音連続 pt, ct を例にとると；lat. SEPTem > sp. siete, it. sette 「7」、lat. OCTO > sp. ocho, it. otto 「8」。

これに対して, Alarcos Llorach (1965: 243), Väänänen (1981: 58), Lloyd (1987: 141) などは drag chain による解釈を提示している⁶. drag chain を西ロマンス諸語の母音間閉鎖音の弱化プロセスに当てはめてみると, 次の 3 つの段階に分けられる; (I) 有声閉鎖音が摩擦音化する. (II) 本来の有声閉鎖音の位置に空き間が生じるので, 無声閉鎖音が有声化する. (III) 本来の無声閉鎖音の位置に空き間が生じるので, 無声閉鎖重子音が単子音化する.

drag chain に基づいた母音間閉鎖音の弱化は, 図 2 のように図式化することができる;

(図 2)

- (I) $D > [\theta]$
 (II) $T > D$
 (III) $TT > T$

このように, push chain と drag chain のどちらが, 西ロマンス諸語の母音間閉鎖音の弱化プロセスを説明するのに妥当であるかという問題については, 研究者の間で見解が分かれており, なお議論されているというのが現状である⁷.

ところで, 2. 1 で挙げたスペイン語の例からもわかるように, 図 1 および図 2 の $D (< T)$ と $[\theta] (< D)$ は後にさらなる弱化をこうむる. すなわち, 現代スペイン語ではラテン語の有声閉鎖音に由来する有声摩擦音は消失するか, もしくは摩擦音のまま保存され, 無声閉鎖音に由来する有声閉鎖音はすべて摩擦音化する. つまり, 由来が異なる 2 つの有声摩擦音の間に衝突が生じている状態にある⁸.

⁶ drag chain を主張する根拠として, Alarcos Llorach は, 文献学的根拠, すなわちスペイン語の史料においてそれぞれの弱化が見られる年代に基づいた議論を展開している. Lloyd が提示する根拠については 3. 3. 1 で詳しく述べる.

⁷ Martinet (1964: 296) では, 母音間閉鎖音の弱化は, 外的な要因, すなわち類似した弱化現象が見られるケルト語の基層の影響であるとされている. しかし, Weinrich (1958: 61) では弱化が生じた地域とケルト人が居住していた区域が一致しないという点から, ケルト語基層説に異議が唱えられている. もちろん, サルデーニャ島にケルト人が居住していたという形跡はない.

⁸ このような現象は, chain shift の枠組みではとらえられないように見える. この事実には, 消失という音変化が閉鎖音体系にどのような影響を及ぼすかという問題と関連すると考えられる (cfr. 註 22).

2. 3 サルデーニャ語における弱化プロセスの先行研究

サルデーニャ語における母音間閉鎖音の弱化プロセスを、閉鎖音体系に生じた chain shift ととらえて論じた研究は、Blasco Ferrer (1984: 71-73) に見られる。そこでは、次のように述べられている；

“Con creazione di una nuova serie di geminate sorde le antiche doppie si scempiano e vanno collidere con le occlusive sorde, secondo quanto mostra il quadro seguente (es. per le labiali):

-BB-	>	/pp ₂ /	>	/p ₂ /
				/p ₁ /

A questo punto è chiara la reazione a catena che consegue al passo anteriore: la degeminazione comporta la sonorizzazione delle occlusive sorde che diventano sonore, e queste ultime a loro volta si spirantizzano (potendo giungere sino al dileguo).” (*op.cit.* 71)

この記述から、Blasco Ferrer はサルデーニャ語における母音間閉鎖音の弱化を push chain によって説明しようとしていることがわかる。また、古サルデーニャ語における二次的な無声閉鎖重子音の出現例として、以下のような語が挙げられている（ラテン語の形式と日本語訳は筆者による）；lat. ABBATEM > sard.ant. appate 「大修道院長」、lat. ABBATISSA > sard.ant. appatissa 「女修道院長」、lat. SABBATUM > sard.ant. sap(p)utu 「土曜日」、lat. HABUI > sard.ant. appi [pf.1sg.] 「持つ」、lat. DEBEAT > sard.ant. deppiat [cong.pres.3sg.] 「～すべきである」、lat. ADDUCERE > sard.ant. battuger [inf.] 「導く」。

しかしながら、現代サルデーニャ語において、無声閉鎖重子音が保存されているという事実は、2. 2 で示した push chain の図式に従えば、Blasco Ferrer の提案と矛盾する；lat. CUPPA > log.mod. kúppu⁹ 「コップ」、lat. GUTTA > log.mod. gútta 「痛風」、lat. SACCUM > log.mod. sákku 「袋」（cfr. 3. 2. 3）。

⁹ 以下、現代ログドロー方言の形式は、すべて音声表記で示す。音声表記の注意点：<è> = [ɛ], <é> = [e], <ò> = [ɔ], <ó> = [o]。

従って、サルデーニャ語の母音間閉鎖音の弱化プロセスが *push chain* に基づいて生じたという *Blasco Ferrer* の説を受け入れることはできない¹⁰。

2. 4 古ログドローロ方言の文献史料について

古ログドローロ方言については、文献史料に実際に記録された形式に基づいて考察を行う。本節では、本稿で用いる古ログドローロ方言の文献について概説する。

本稿では、古ログドローロ方言の文献として、*Condaghe di San Nicola di Trullas*（以下 CSNT）を用いる¹¹。CSNT とは、現在のサッサリ (Sassari) 州、ポッツォマッジョーレ (Pozzomaggiore) 近郊にあった San Nicola di Trullas 修道院における、土地や財産の寄進を記録した文書である。CSNT は、1113 年から 13 世紀後半にかけて、24 人の写字生によって書かれたとされており、計 332 節からなる (*Blasco Ferrer* 2003: 155-157)。本稿では *Merci* (2001) の校訂本を用いる。

CSNT の音韻に関する先行研究は、*Wagner* (1939-1940) などに見られる。しかし、そこでは個々の音変化を独立した事象として記述するにとどまっており、たとえば *chain shift* などのような、音変化を体系的、構造的な観点から論じるという立場はとられていない。

次章では、サルデーニャ語ログドローロ方言における母音間閉鎖音の弱化プロセスについて観察、分析を行う。その際、以下の辞書類を参照した；*Atzori* (1953), *Lewis and Short* (1975), *Meyer-Lübke* (1992), *Wagner* (1960-1964)。

¹⁰ また、イタリア語の例が示すように（註 5）、二次的な無声閉鎖重子音の増加は、本来の無声閉鎖重子音の単子音化を引き起こす要因にはならないといえる。このような点からも、*Blasco Ferrer* の見解は再検討を試みる余地がある。

¹¹ この時代のサルデーニャ語には、部分的にはあるが、すでにログドローロ方言とカンピダーノ方言の特徴が現れ始めている。従って、古サルデーニャ語においても、両方言を区別して扱うことが可能である。なお、*condaghe* という名称は、ギリシア語 *κοιτάκιον* 「木の棒切れ」に由来し、教会における土地や財産の寄進を記録した文書全般を指す。

3 本論

3. 1 古ログドーロ方言における母音間閉鎖音

本節では、ラテン語における母音間の有声閉鎖音、無声閉鎖音、無声閉鎖重子音が CSNT の古ログドーロ方言においてどのように現れているかを、唇音、歯音、軟口蓋音それぞれについて見る¹²。

3. 1. 1 有声閉鎖音

lat. -b-, -v- > log.ant. --, -<v>-¹³ :

HABERE > aver [inf.] (332) (abeat [ind.impf.3sg.] (18, 24ⁱⁱ, 25, 27, 33ⁱⁱ, 34, 36, 43, 45, 46ⁱⁱⁱ, 51, 52ⁱⁱ, 63, 64, 72, 97, 115, 116ⁱⁱ, 140, 153, 154, 161, 163, 182, 204, 224), aveat [id.] (149, 154, 161, 179, 211, 222, 237, 257, 260, 262ⁱⁱⁱ, 281ⁱⁱ, 298, 317), aviat [id.] (277ⁱⁱⁱ, 283, 291, 308, 330), abean [ind.impf.3pl.] (15, 50, 73ⁱⁱ, 86, 102, 127), avian [id.] (323, 326, 328, 331, 332), aveamus [ind.impf.1pl.] (130, 240, 272)) 「持つ」, VACANTIVUM > bacantibu (137ⁱⁱ) (vacantivum (283)) 「休耕地の」, VIVA > biba (52) 「生きている」, CABALLUM > caballu (10, 47, 56, 61ⁱⁱ, 71, 78, 82, 83, 87, 95, 96, 114, 116, 125, 126, 127, 172, 173, 199, 200, 211, 239, 246, 265, 316, 319) (caballos (17, 99, 101, 102ⁱⁱ, 311), kaballu (265), cavallu (257, 295, 327, 329)) 「馬」, CANNABARIUM > cannabariu (140^{iv}) 「大麻」, CUBITA > cubita (49, 50, 86, 133, 172, 234, 248, 267) (cubitos (173, 210)) 「(長さの単位)」, DEBITUM > debitu (63, 177) 「負債」, FABA > faba (3, 4) 「そらまめ」, FABRICARE > frabricare [inf.] (145) 「建設する」, IBI > ibi (2, 3, 4, 73, 80ⁱⁱ, 92, 161) (ivi (221, 222ⁱⁱ)) 「そこに」, JUVAMENTUM > iuvamentu (199, 257, 293) 「利益」, LABOREM > labore (1, 2, 11, 24, 54, 55, 58, 137, 157, 172, 173, 174, 183, 210, 219, 222, 225, 248, 250) (llabore¹⁴

¹² 以下、それぞれの語の後に示した数字は、CSNT における出現箇所(節)を表す。その右肩に付したローマ数字は、同一節中に現れる回数を意味する。同一語彙の屈折・派生形式は、その語彙の後に括弧でくくって併記する。<> は文字表記を意味する。

また、以下に提示する各語彙には、サルデーニャ語における意味を付記する。なお本稿では、人名、地名などの固有名詞は考察の対象外とした。

¹³ 俗ラテン語の段階(1世紀頃)において、母音間の -- (/b/) と -<v>- (/w/) は合流して摩擦音 [β] として実現されていた。従って -- と -<v>- の表記に混同が見られる；PLEBES / PLEVIS 「民衆」, TABES / TAVIS 「汚職」, TOLERABILIS / TOLERAVILIS 「耐えうる」(Väänänen *op.cit.* 50)。本稿で扱うテキストでも、-- と -<v>- が混同して表記されている例が存在することから、この変化はサルデーニャ語にも継承されていると考えるほうが妥当である。このような理由から本稿では、ラテン語の -b- と -v- を唇音として扱う(cfr. Wagner 1984: 162-165)。

¹⁴ CSNT では、語頭子音が二重に表記されることがある；(e) ppumu (26) 「果樹園」,

(137, 170, 197, 209ⁱⁱⁱ), *lavore* (221, 222ⁱⁱ, 226, 227, 252, 266, 275, 294)) 「収穫された果実」, *LIBERUS* > *liberos* (1, 2, 4, 54, 57, 77, 113, 128, 151, 255, 305) (*liveros* (222, 224, 226, 227, 269, 271, 283)) 「解放奴隷」, *MALEHABITUM* > *malabitu* (113, 218) (*malabita* (44), *malavidu* (160), *malavida* (191)) 「病気の」, *NOVELLUM* > *nobellu* (63) (*novellu* (131, 219)) 「1才未満の仔牛」, *NOVA* > *nova* (140ⁱⁱⁱ) 「新しい」, *OLIVA* > *oliba* (97) (*oliva* (106)) 「オリーブ」, *PRESBITERUM* > *prebiteru* (46, 50, 53, 67, 80ⁱⁱ, 82, 108, 117, 119, 130, 135, 137, 138, 140, 141, 143, 148, 152, 161, 162, 165, 177, 211^{iv}, 216, 230, 232, 246, 261, 262, 263, 265, 268, 270, 301, 305ⁱⁱ, 312, 313, 329) (*prebiteros* (46ⁱⁱ, 80), *previteru* (278, 280, 285, 290, 291, 295, 297ⁱⁱ, 298, 299, 300^{iv}, 321)) 「司祭」, *RIVUM* > *rivum* (294, 325ⁱⁱ) (*ribu* (17ⁱⁱⁱ, 70, 79, 107, 158, 163^{iv}), *rivu* (108ⁱⁱⁱ, 122, 259, 271ⁱⁱⁱ)) 「小川」, *RUBEUM* > *rubiu* (194) (*ruvum* (325)) 「赤い」, *TOTU UBE* > *totubi* (6) (*totube* (17^v, 50^v, 70, 79^{iv}, 80ⁱⁱ, 82ⁱⁱ, 94ⁱⁱⁱ, 127, 158ⁱⁱ, 195, 222), *tottuve* (259ⁱⁱⁱ), *toctuve* (325ⁱⁱⁱ), *tuttove* (271ⁱⁱⁱ)) 「～に沿って」, *TUTABANT* > *tutaban* [ind.impf.3pl.] (153) 「埋葬する」, *UBE* > *ubi* (65) (*ube* (7, 17^{iv}, 46, 54, 65, 79ⁱⁱ, 112, 113, 148, 153ⁱⁱⁱ, 155, 203, 254, 259ⁱⁱⁱ, 271), *uve* (222, 276, 305, 323)) 「どこ」.

lat. -b-, -v- > log.ant. -ϕ- :

HABEBAT > *abeat* [ind.impf.3sg.] (18, 24ⁱⁱ, 25, 27, 33ⁱⁱ, 34, 36, 43, 45, 46ⁱⁱⁱ, 51, 52ⁱⁱ, 63, 64, 72, 97, 115, 116ⁱⁱ, 140, 153, 154, 161, 163, 182, 204, 224) (*aveat* [*id.*] (149, 154, 161, 179, 211, 222, 237, 257, 260, 262ⁱⁱⁱ, 281ⁱⁱ, 298, 317), *aviat* [*id.*] (277ⁱⁱⁱ, 283, 291, 308, 330), *abean* [ind.impf.3pl.] (15, 50, 73ⁱⁱ, 86, 102, 127), *avian* [*id.*] (323, 326, 328, 331, 332), *aveamus* [ind.impf.1pl.] (130, 240, 272)) 「持つ」, *DELEGAVERUNT* > *delegarun(mi)* [pf.3pl.] (235) 「与える」, *RIVUM* > *riu* (330) 「小川」, *TOTU UBE* > *tottue* (259, 305) (*toctue* (325)) 「～に沿って」, *TUTAVIT* > *tutait* [pf.3sg.] (59) (*tutarun* [pf.3pl.] (162)) 「埋葬する」.

(a) *tterra* (179) 「土地」, (e) *ccando* (5) 「～のとき」など、現代サルデーニャ語においても、音声的に、同様の現象が見られる；*a domo* [addòmo] 「家へ」, *e tue* [ettúe] 「そして君は」など (Blasco Ferrer 1994: 37). このような現象が見られるのは、その直前の語が *e* (< lat. ET) 「そして」と *a* (< lat. AD) 「～に」の場合にはほぼ限られている。この現象は、イタリア語に見られるいわゆる *raddoppiamento sintattico* と関連づけられる可能性があるが、その詳細については次稿に譲りたい。

lat. -d- > log.ant. -<d>⁻¹⁵ :

VADUM > badu¹⁶ (17^{iv}, 79, 80ⁱⁱ, 85, 98, 127, 199ⁱⁱ, 330) (vado (245)) 「道」, CAUDA > coda (79, 82) (codas (108, 113)) 「国境」, CODICEM > codice (16, 19, 22, 117, 136, 140) 「文書」, CONCLUDET > concludet [ind.pres.3sg.] (325) 「締めくくる」, JUDICEM > iudice (7, 46ⁱⁱⁱ, 52, 65ⁱⁱ, 68, 79, 80, 140ⁱⁱ, 150ⁱⁱ, 155ⁱⁱ, 162ⁱⁱ, 163, 164, 179^{iv}, 182, 188ⁱⁱⁱ, 214, 218, 231ⁱⁱ, 232ⁱⁱⁱ, 245, 259, 270^{iv}, 276, 300, 330^v) (iudike (179, 188, 192, 280, 294ⁱⁱ, 300)) 「giudicato¹⁷ の統治者」, JUDICAVIT > iudicaît [pf.3sg.] (46, 140) (iudicarun(mi)¹⁸ [pf.3pl.] (46, 52, 162, 211, 300)) 「統治する」, PEDALEM > pedale (108, 212, 213) 「徒歩で」, PEDEM > pede (8, 10ⁱⁱⁱ, 15, 32, 46, 47, 54, 74ⁱⁱ, 78, 117, 119, 120, 121^{vi}, 123, 125, 146, 157, 160, 163^{xi}, 166, 172, 173ⁱⁱⁱ, 177, 183, 185, 186, 209^v, 224ⁱⁱ, 233, 272ⁱⁱⁱ, 274, 279ⁱⁱⁱ, 290ⁱⁱ, 291ⁱⁱ, 292, 300ⁱⁱ, 309, 324^v) (pedes (15, 67, 121ⁱⁱ, 163ⁱⁱ, 209ⁱⁱ, 224ⁱⁱ, 240, 288, 293)) 「足」, PRAEDAVI > predai(lu) [pf.1sg.] (276) 「差し押さえる」, PRAEDATUM > predatu (276) 「差し押さえた財産」, PRODEM > prode (201, 231) 「利点」, SYNODUM > sinudo (232) 「会議」.

lat. -d- > log.ant. -φ- :

ADITUM > aitu (108, 330) 「入ること」, VADET > baet [ind.pres.3sg.] (79, 82) 「行く」, BADIUM > baiu (83, 173) 「栗毛色」, FRIGIDA > frigia (107) 「寒い」, MEDIUM > meu (164) 「半分」, MODIIS > moios (3, 6, 8, 12, 13, 28, 30, 57, 70, 75, 90, 98, 100, 101, 104, 105, 107, 131, 139, 140, 147, 153, 172, 173, 193, 210, 219, 221, 222ⁱⁱ, 248, 250, 251, 289, 295, 303, 329) 「(穀物を量る単位)」.

lat. -g- > log.ant. -<g>- :

AGER > ager (80) 「耕作地」, DELEGAVERUNT > delegarun(mi) [pf.3pl.] (235) 「与える」, EGO > ego (*passim*) 「私」, FRIGIDA > frigia (107) 「寒い」, FUGITUS

¹⁵ 当該子音にメタテシスが生じている形式が確認された: PALUDEM > padule (65, 124, 128, 129, 130, 131, 132, 133, 134, 199, 229, 278) 「湿地」. この語彙では, メタテシスが規則的に作用し, *palude という形式は存在しない.

¹⁶ 語頭における v > b は, ベタシズム (betacismo) と呼ばれ, サルデーニャ語を特徴づける音変化の 1 つである (cfr. Blasco Ferrer 1984: 70).

¹⁷ 中世のサルデーニャ島は 4 つの王国, カリアリ (Cagliari), アルボレア (Arborea), トッレス (Torres), ガッルーラ (Gallura) に分かれており, それぞれを giudicato と呼ぶ.

¹⁸ サルデーニャ語では, 目的語代名詞が動詞の活用形に直接付加され, 全体で 1 語のようにふるまう. そのような代名詞は括弧でくくって示す.

> fugitos (208) 「逃げた」, JUGUM > iugu (9, 176, 210) 「支配」, iuga (17) 「くびき」, LEGATUM > legatu (163) 「使節」, MAGISTREM > magister (182) 「主」, NIGELLUM > nigellu (154) 「黒い」, PLAGA > plaga (218) 「地区」, REGERE > reger [inf.] (43) 「支配する」, SAGUM > sagu (2, 4, 9, 57, 174) (sagos (50)) 「ウールのコート」, SIGILLUM > sigillu (95, 122, 248) 「印章」.

lat. -g- > log.ant. -ϕ- :

MAGISTREM > mastro (234) (maistru (266), mastru (270, 306)) 「主」, TRAGINARE > trainu (330) 「小川」.

3. 1. 2 無声閉鎖音

lat. -p- > log.ant. -<p>- :

AD PROPE > apprope (17) 「近くに」, ARCHIEPISCOPUM > archipiscopu (150ⁱⁱ, 291, 294) (archiepiscopu (51, 182)) 「大司教」, CAPUT > caput (60ⁱⁱ, 64ⁱⁱ, 71, 78, 82ⁱⁱ, 83ⁱⁱ, 87ⁱⁱ, 91ⁱⁱ, 112ⁱⁱ, 114ⁱⁱ, 125ⁱⁱ, 127, 138ⁱⁱ, 198, 239ⁱⁱ, 246ⁱⁱ) 「指導者」, COPULATAS > clopatas (100) 「結婚した」, EPISCOPUM > episcopu (182ⁱⁱ) (piscopu (150ⁱⁱ, 280, 294ⁱⁱ, 320)) 「司教」, NEPOTEM > nepote (29, 71, 159, 179, 182, 199, 222, 245, 253, 258, 260ⁱⁱ, 308, 330) (nepotes (46, 170, 234, 262)) 「おい/めい」, OPERA > opera (25, 90, 147, 241) (opere (222), operas (3, 24, 73ⁱⁱ, 178, 288ⁱⁱ)) 「労働日」, POPULAREM > pupulare (269, 71) (populare (179ⁱⁱ, 194, 305, 330ⁱⁱ)) 「市民」, PUPILLUM > pupillu (26, 43, 140ⁱⁱ, 270) (pupillos (179, 330), pupillare (194)) 「主人」, SUPERCLAVIT > superclait [pf.3sg.] (26, 62, 63, 135) 「打ち勝つ」.

lat. -p- > log.ant. -- :

EPISCOPUM > piscobu (320) 「司教」.

lat. -t- > log.ant. -<t>-¹⁹ :

ABBATEM > abbate (62, 118, 119, 273, 291) (apate (119), abate (233)) 「大修道院

¹⁹ t の現われについては、形態論的に動機づけられた制約が 1 つ確認された。過去分詞語尾 -ATUM / -ATA, -ITUM / -ITA はすべて -atu / -ata, -itu / -ita で現れ、弱化は生じない；COMPORATUM > comporatu (116, 179ⁱⁱⁱ, 203, 330ⁱⁱ) 「買われた」, LABORATA > laborata (177, 186, 207, 209) 「収穫された」, VENDITUM > venditu (212, 257) 「売られた」, PERDITA > perdita (27ⁱⁱ, 76, 88) 「失われた」.

長」, ADITUM > agitu²⁰ (17, 113, 302, 303, 330) (aitu (108, 330)) 「入ること」, ANDATORIUM > andatoriu (80) 「支援」, ARCHIPRESBYTERUM > archiprete (294) 「大司祭」, VERITATEM > beritate (80) (veritate (155, 332)) 「真実」, VITEM > bite (62, 63) (vites (220)) 「ぶどうの木」, VOLUNTATEM > boluntate (3, 18, 26, 48, 52, 68ⁱⁱ, 71, 95, 96, 97ⁱⁱ, 98, 100, 101, 103, 106, 111, 115, 122, 129, 130, 139, 142, 153, 163, 188, 256, 265, 276, 277, 278, 284, 291, 298, 308, 320, 332ⁱⁱⁱ) (voluntate (104, 105, 143, 148, 151, 152, 155, 158, 164ⁱⁱ, 165, 169, 172, 188, 201, 209, 227, 245, 278, 289)) 「意志」, COGNATA > connata (163) (connatas (306), connatu (18, 86, 88, 112, 132, 133, 157, 162, 163, 173), cuniatu (92, 93, 108, 128, 228), cunnatu (244, 251), connatos (23, 157, 208, 209), conatos (127), cunnatos (87)) 「義理の兄弟」, COTEM > cote (259) 「岩」, CAUTEM > cotina (315), (cotinaça (94, 222)) 「砥石」, CUBITA > cubita (49, 50, 86, 133, 172, 234, 248, 267) (cubitos (173, 210)) 「(長さの単位)」, CURATORIA > curaturia (80) (curatore (17, 27, 43, 46, 65ⁱⁱ, 80ⁱⁱ, 102, 117, 121, 140^{iv}, 179^{vi}, 194, 212, 233, 236, 267, 269, 270, 272, 273, 277, 280, 305ⁱⁱ, 308, 319, 323ⁱⁱ, 330^{vi}, 331), curatoria (80, 270, 331)) 「官吏」, DATA > data (195, 211, 222, 260, 323ⁱⁱ) (datu (70, 187), dato (273)) 「寄進」, DEBITUM > debitu (63, 177) 「負債」, DOMATUM > domatu (20, 82, 125, 126, 127, 128, 135, 157, 172, 198, 226, 267ⁱⁱ, 318, 319) (domata (6, 137, 148, 174, 209, 283), domato (297), domatos (17, 210)) 「飼われた」, LATA > lata (65) 「長い」, LATUM > latu (211) (latus (*passim*), llatus (182ⁱⁱ, 188, 194, 209)) 「半日間の奴隷の労働」, MALEHABITUM > malabita (44) (malabitu (113, 218)) 「病気の」, MANDATOREM > mandatore (1, 2, 4, 54, 57, 65, 77, 113, 128, 151, 185, 193, 222, 224, 226, 227, 255, 267, 269, 271, 283) 「使節」, MARITUM > maritu (15, 18ⁱⁱ, 69, 142, 278, 300, 320) 「夫」, META > meta (256) 「干し草の山」, NEPOTEM > nepote (29, 71, 159, 179, 182, 199, 222, 245, 253, 258, 260², 308, 330) (nepotes (46, 170, 234, 262)) 「おい/めい」, PARTITURA > parçitura (56) 「配分」, PECCATUM > peccatu (150) 「罪」, POENITENTIA > penitentia (46, 162, 265, 285) 「贖罪」, PETIVIT > petivit [pf.3sg.] (300) (petiviti(mi) [*id.*] (293)) 「要求する」, PLACITUM > placitu (145) 「気に入られた」, PLANETA > planeta (230) 「祭服」, POTUERUNT > poterun [pf.3pl.] (140, 332) 「～できる」, PRATUM > pratu (80, 127, 324) 「牧草地」, PRAEDATUM > predatu (276) 「差し押さえた財産」, PRESBITERUM > prebiteru (46, 50, 53, 67, 80ⁱⁱ, 82, 108, 117, 119, 130, 135, 137, 138, 140, 141, 143, 148, 152, 161, 162, 165, 177, 211^{iv}, 216, 230, 232, 246, 261, 262,

²⁰ <d> が <g> に置き換わっているが、その原因は不明である。なお、ヌーオロ方言では現在でも áyiðu 「入ること」として軟口蓋音が保存されている。

263, 265, 268, 270, 301, 305ⁱⁱ, 312, 313, 329) (prebiteros (46ⁱⁱ, 80), previteru (278, 280, 285, 289, 290, 291, 295, 297², 298, 299, 300^{iv}, 321), presbiter (16, 37, 136, 256)) 「司祭」, SECATA > secata (316, 327) 「切られた」, TOTA > tota (52, 80, 113, 116, 117, 151, 179ⁱⁱⁱ, 182, 194, 195, 211, 236, 270, 277, 305, 330ⁱⁱⁱ) (totas (170), totu (48, 52, 80, 84, 163, 192, 194ⁱⁱⁱ, 195, 199, 200, 211, 259, 300), totos (99, 151, 157, 209, 228, 248, 281, 298, 322)) 「すべての」, TRITICUM > triticu (4, 6, 57, 158, 193, 295) (tritico (289)) 「小麦」, TUTARE > tutare(la) [inf.] (46, 242) (tutait [pf.3sg.] (59), tutaban [ind.impf.3pl.] (153), tutarun [pf.3pl.] (162)) 「埋葬する」, URBITUM > urbitu (259ⁱⁱ) 「小道」, VETEREM > vetere (115) 「古い」, VITA > vita (14, 113, 137, 268), bita (57) 「生命」.

lat. -t- > log.ant. -<d>- :

MALEHABITUM > malavidu (160) (malavida (191)) 「病気の」, TRITICUM > tridicu (3, 8, 70, 81, 90, 98, 100, 101, 104, 105, 107, 131, 147, 153, 169, 185, 225, 247, 321, 329) 「小麦」.

lat. -k- > log.ant. -<c>-, -<k>-, -<ch>- :

ANTE SECUM > antesica (50, 62, 64), antesicu (18, 61, 91, 95, 127, 209, 257, 270) 「代わりに」, VACANTIVUM > bacantibu (137ⁱⁱ) (vacantivum (283)) 「休耕地の」, VERVECEM > berbece (133, 178, 220, 222ⁱⁱ, 267) (berbeces (2, 4, 17, 27, 28, 48, 74, 99, 101, 103ⁱⁱ, 116, 127, 137, 140, 168, 171, 172, 173, 174, 182, 214, 221, 234, 247, 283), berbekes (243, 287)) 「羊」, VICINUS > bicinos (48, 68, 69, 84) 「隣の」, VOCARE > bocare [inf.] (194) (bocai(los) [pf.1pl.] (52), bocait [pf.3sg.] (161), vocan [ind.pres.3pl.] (65), bocande [ger.] (9), vocaisse [cong.impf.3sg.] (300)) 「自由にする/取り除く」, CANONICUS > calonicos (294) 「教会法にかなった」, CLERICUM > clericu (150, 309, 320) 「聖職者」, CODICEM > codice (16, 19, 22, 117, 136, 140) 「文書」, CRUCEM > cruce (46, 65ⁱⁱ, 79ⁱⁱ, 140, 152, 162, 179, 238ⁱⁱ, 269, 271, 330), crukes (254) 「十字架」, CUCULLA > cuculla (140) 「修道服」, DECIMA > decuma (294) 「10 分の 1 税」, DOMESTICA > domestica (46, 56ⁱⁱⁱ, 127ⁱⁱ, 245, 315) (demestica (259)) 「奴隷の耕作地」, DOMINICA > donnica (288) (donnicu (6)) 「領主」, DOMINICELLUM > donnicellu (83, 102, 140ⁱⁱ, 300) (donnikellu (206, 280, 326)) 「(giudicato の統治者の家族に与えられる称号)」, ILECEM > elice (80, 113) 「トキワガシ」, FACERE > facer [inf.] (236) (facere [id.] (164), fakere [id.] (308), faker [id.] (300, 331ⁱⁱ), facet [ind.pres.3sg.] (50), feci [pf.1sg.] (5, 57, 101, 102, 117, 140, 148, 157, 168, 170, 241), feki [id.] (172,

173, 247, 256, 267), fecit [pf.3sg.] (15, 140ⁱⁱ, 188, 232, 245), fekit [*id.*] (270, 328, 331), fechit [*id.*] (326), fecerun [pf.3pl.] (270), fakes [ind.pres.2sg.] (150), fakemus [ind.pres.1pl.] (286)) 「行う」, FICUM > ficu (154, 201) 「いちじく」, JACULA > iaca (80) 「木製の扉」, JUDICAVIT > iudicait [pf.3sg.] (46, 140) (iudicarun [pf.3pl.] (140, 179, 182, 328, 330)) 「統治する」, JUDICEM > iudice (7, 46ⁱⁱⁱ, 52, 65ⁱⁱ, 68, 79, 80, 140ⁱⁱ, 150ⁱⁱ, 155ⁱⁱ, 162ⁱⁱ, 163, 164, 179^{iv}, 182, 188ⁱⁱⁱ, 214, 218, 231ⁱⁱ, 232ⁱⁱⁱ, 245, 259, 270^{iv}, 276, 300, 330^v) (iudike (179, 188, 192, 280, 294ⁱⁱ, 300)) 「giudicato の統治者」, LAICUM > lacu (75, 84, 212, 326) 「世俗の」, LOCUM > locu (182, 228, 305) 「場所」, MANDICARE > mmandicare(vi) [inf.] (43) (mandicat [ind.pres.3sg.] (108ⁱⁱ), mandicaban [ind.impf.3pl.] (80)) 「搾取する」, MECUM > mecu (46, 51, 80, 150, 163, 188ⁱⁱ, 206, 211, 231, 232, 235, 236, 238, 245, 276, 277, 287, 305, 306, 332) 「私とともに」, NUCEM > nuce (112) 「くるみ」, PAUCUM > pacu (69) 「わずかな」, PECULIAREM > pecuiare (269, 271, 305) 「固有の」, PLACET > placet [ind.pres.3sg.] (164) (plakit [*id.*] (256), placende(nos) [ger.] (26, 62, 64, 83, 87, 114, 173), plachende(nos) [*id.*] (320, 321)) 「気に入る」, SAECULUM > seculum (43) 「世紀」, SECUS > secus (140) 「続いて」, SENECE > senekes (278) 「老人」, SURIACA > suriaca (9, 94, 100, 108) 「砕石器」, TRITICUM > triticu (4, 6, 57, 158, 193, 295) (tritico (289)) 「小麦」, VICARIUM > vicariu (331) 「管区長」.

lat. -k- > log.ant. -<g>- :

ALIQUAM > alige (297) 「誰か」, ADDUCERE > batuger [inf.] (80, 140, 182, 235, 245) (bactuger [*id.*] (179, 330), battuger [*id.*] (300), batugamus [cong.pres.1pl.] (140), batugitende(los) [ger.] (208)) 「導く」, FACIT > faget [ind.pres.3sg.] (297) (fegi [pf.1sg.] (218)) 「行う」.

3. 1. 3 無声閉鎖重子音

lat. -pp- > log.ant. -<pp>- :

該当語彙なし.

lat. -tt- > log.ant. -<tt>- :

QUATTOR > battor (257) 「4」, LITTERA > littera (65) 「文字」.

lat. -kk- > log.ant. -<cc>- :

VACCA > bacca (7, 47, 70, 95, 96, 99, 111, 112, 145, 148ⁱⁱ, 170, 183, 209, 220, 249, 318)

(*baccas* (17, 27, 116, 173), *vacca* (267)) 「牝牛」, *VACCONEM* > *baccone* (28, 137, 170) (*vaccone* (295, 329)) 「牝牛」, *OCCISIT* > *occisit* [pf.3sg.] (117, 255) 「殺す」, *PECCATUM* > *peccatu* (150) 「罪」, *SICCUM* > *siccu* (17) 「乾いた」.

古ログドローロ方言において、ラテン語の無声閉鎖重子音は保存される。しかしながら、本来重子音であったものが、表記のうえでは単子音で書かれている例も見られる；*GUTTUR* > *guturu* (86, 87) 「小川」, *VACCA* > *baca* (168) (*bacas* (74)) 「牝牛」, *BACCEAS* > *bacias* (228) 「洗面器」, *BUCCELLUM* > *bucellu* (205, 277) (*bukellu* (324ⁱⁱ)) 「4 分の 1」, *OCCISISTI* > *okisisti* [pf.2sg.] (305) 「殺す」, *PICCINNUS* > *picinnos* (163) 「子ども」, *SUCCIDATA* > *sucirata* (94) 「落ちた」.

また、無声閉鎖重子音のほかにも、子音連続の前部要素が表記されず、単子音として現れている例が存在する；*FACTUM* > *fatu* (46, 270) 「行われた」, *DICTARE* > *ditare* [inf.] (164) (*ditabat* [ind.impf.3sg.] (46ⁱⁱ, 74, 95, 97, 126, 127, 139, 162, 170, 175ⁱⁱ, 199, 216, 223), *ditava* [*id.*] (233ⁱⁱ, 260), *ditaban* [ind.impf.3pl.] (154), *ditavan* [*id.*] (161), *ditatu* (270)) 「～に属する」, *IECTATUM* > *ietatu* (331, 332) (*getatu* (326, 328)) 「追放された」. それぞれ, *factu* (236, 331), *dictabat* (46ⁱⁱ), *iectatu* (331) と比較されたい.

さらに、本来単子音であるものに、ハイパーコレクションによって語源的に無関係な子音が付加され、重子音または子音連続として表記されている例や、重子音 (*dd*) が子音連続 (*ct*) として書かれている例も散見される；*TOTU UBE* > *toctuve* (325ⁱⁱⁱ), *toctue* (325), *tottuve* (305ⁱⁱ), *tuttove* (271ⁱⁱⁱ), *tottue* (259, 305) 「～に沿って」, *ADDUCERE* > *bactuger* [inf.] (179, 330) 「導く」.

以上のような観察から、CSNT における重子音の表記法には様々な混同が生じていたことがうかがえる。ただし、これはあくまで表記における混同であり、古ログドローロ方言における音韻的な変化をともしうものではないと推定したい。この仮説は、3. 2. 3 で述べる、現代ログドローロ方言における無声閉鎖重子音の現われを見ることで明確になる。

3. 2 現代ログドローロ方言における母音間閉鎖音

本節では、古ログドローロ方言における母音間閉鎖音が現代ログドローロ方言においてどのように現れるかを見る。現代ログドローロ方言の形式は、

Wagner (1960-1964) を参照した²¹.

3. 2. 1 有声閉鎖音

(lat. -b-, -v- >) log.ant. -- , -<v>- > log.mod. -ϕ- :

abeat > áit 「持つ」, bacantibu > bayantíu 「休耕地の」, biba > bía 「生きている」, caballu > káđđu 「馬」, cubita > kuíđa 「ひじ」, faba > fá 「そらまめ」, frabricare > fraiyáre 「建設する」, labore > laòre 「収穫された果実」, liberos > líeros 「自由な」, nobellu > noédđu 「1才未満の仔牛」, nova > nòa 「新しい」, oliba > olía 「オリーブ」, prebiteru > preíðeru 「司祭」, ribu > erríu 「小川」, rubiu > rúju 「赤い」, ube > úe 「どこ」.

(lat. -d- >) log.ant. -<d>- > log.mod. -ϕ- :

concludet > konkrúit 「締めくくる」, iudice > zuiýe 「裁判官」, padule > paúle 「湿地」, pedale > peále 「徒歩で」, pede > pèe 「足」, predailu > preare 「差し押さえる」, predatu > preáđu 「差し押さえた財産」, prode > pròe 「利点」.

(lat. -g- >) log.ant. -<g>- > log.mod. -ϕ- :

ego > èo 「私」, fugitos > fuíðos 「逃げた」, iugu > zú 「支配」, legatu > leáđu 「使節」, nigellu > niédđu 「黒い」, reger > reère 「支配する」, sagu > sáu 「ウールのコート」.

うえに挙げた例のように、現代ログドーロ方言ではラテン語の有声閉鎖音はすべて消失する。この現象は、2. 1 で見たように、有声閉鎖音が消失せず、有声摩擦音として保存されている例が存在するスペイン語とは異なる。従ってこの事実は、ログドーロ方言における母音間閉鎖音の弱化現象と、西ロマンズ諸語におけるそれとの間に見られる相違の 1 つであるといえる。

²¹ 以下に示す古ログドーロ方言の形式も CSNT に記録された形式であるが、紙幅の都合上、CSNT における出現箇所は割愛する。また、古ログドーロ方言に存在した語彙が現代ログドーロ方言では失われ、借用語に置き換わっている場合もあることから、古ログドーロ方言にさかのぼることができる現代ログドーロ方言の形式のみを提示する。

3. 2. 2 無声閉鎖音

(lat. -p- >) log.ant. -<p>- > log.mod. -[β]- :

caput > kaβúðe 「指導者」, clopatas > kroβáðas 「結婚した」, nepote > neβòðe 「おい/めい」, pupillu > puβíððu 「主人」.

(lat. -t- >) log.ant. -<t>- > log.mod. -[ð]- :

abbate > aβaðía 「大修道院長」, aitu > aíðu 「入ること」, beritate > beriðáði 「真実」, bita > bíða 「生命」, bite > bíðe 「ぶどうの木」, connatu > konnáðu 「義理の兄弟」, cote > kòðe 「岩」, cotina > koðína 「砥石」, cubita > kuíða 「ひじ」, data > dáða 「寄進」, domatu > domáðu 「飼われた」, latus > láðus 「動物の肉の半分」, maritu > mariðu 「夫」, meta > mèða 「干し草の山」, nepote > neβòðe 「おい/めい」, secata > seyáða 「切られた」, tutare(la) > tuðáre 「埋葬する」, peccatu > pekkáðu 「罪」, placitu > prayíðu 「気に入られた」, pratu > práðu 「牧草地」, predatu > preáðu 「差し押さえた財産」.

(lat. -k- >) log.ant. -<k>- , -<c>- , -<ch>- > log.mod. -[γ]- :

berbece > berbèye 「羊」, bocare > boýáre 「呼ぶ」, calonicos > kalóniyos 「教会法にかなった」, clericu > klériyu 「聖職者」, cruce > rúye 「十字架」, cuculla > kuyúðða 「修道服」, decuma > déyuma 「第 10 の」, elice > éliye 「トキワガシ」, facere > fáyere 「行う」, ficu > fíyu 「いちじく」, iaca > jáya 「木製の扉」, lacu > láyu 「世俗の」, locu > lóyu 「土地」, mmandicare(vi) > mandiyáre 「食べる」, nuce > núye 「くるみ」, pacu > páyu 「わずかな」, secus > séyus 「後ろに」, senekes > senèyes 「老いた」, tridicu > tríyu 「小麦」.

3. 2. 3 無声閉鎖重子音

多くの先行研究において、サルデーニャ語はラテン語の無声閉鎖重子音を保存している、と述べられている。例えば Lausberg (1965: 406) には、次のような記述がある；

“Esta pronunciación de las consonantes dobles se ha conservado hasta hoy en sardo y en italiano del sur y centro.”

以下にこの記述を裏付ける実例を示す。ただし、古ログドローロ方言では

無声閉鎖重子音が現れる例が少ないので、ここでは補足的に、ラテン語と現代ログドローロ方言の間の無声閉鎖重子音の変化についても示す；

log.ant. -<pp>- > log.mod. -[pp]- :

該当語彙なし.

(lat. -pp- > log.mod. -[pp]- :)

CUPPA > kúppu 「ワイン樽」, STUPPA > stúppa 「糸くず」.

log.ant. -<tt>- > log.mod. -[tt]- :

battor > báttoro 「4」, littera > líttera 「文字」.

(lat. -tt- > log.mod. -[tt]- :)

GUTTA > gútta 「痛風」, CATTUM > gáttu 「猫」, MITTERE > míttere 「置く」,
SAGITTA > saétta 「矢」, GLUTTUM > glúttu 「大食の」.

log.ant. -<cc>- > log.mod. -[kk]- :

bacca > bákká 「牝牛」, occisit > okkísit 「殺す」, peccatu > pekkáðu 「罪」,
siccu > síkku 「乾いた」.

(lat. -kk- > log.mod. -[kk]- :)

SACCUM > sákku 「袋」, BECCUM > bíkku 「くちばし」, MUCCUM > múkku
「鼻水」.

これらの例から、現代サルデーニャ語ではラテン語の無声閉鎖重子音は保存されていることがわかる。従って、古サルデーニャ語において重子音が単子音で表記されているような例 (cfr. 3. 1. 3) は、音韻的な変化によるものではなく、表記上の混同であったと考えるほうが妥当である。

3. 3 観察結果

3. 1 および 3. 2 で、ラテン語の母音間閉鎖音が古ログドローロ方言、現代ログドローロ方言それぞれの段階においてどのような変化を経たかを見た。本節では、その観察結果を分析し、閉鎖音体系にどのような変化が生じたかを検討する。

3. 3. 1 古ログドローロ方言の母音間閉鎖音の体系

3. 1 で見た形式から、古ログドローロ方言では、表記上、ラテン語の有声閉鎖音および無声閉鎖音はほとんどの場合において保存されていることがわかる。一方、現代ログドローロ方言では、ラテン語の有声閉鎖音はすべて消失し、無声閉鎖音は（有声閉鎖音を経て）有声摩擦音に変化していることがうかがえる。

本稿では、古ログドローロ方言の段階で、表記上には現れないが、有声閉鎖音の摩擦音化が生じていたと考えたい。その根拠として、註 13 でも述べたように、俗ラテン語の母音間における *--* と *-<v>-* の混同が古ログドローロ方言にも観察されることが挙げられる；HABEAT > abeat / aveat / aviat 「持つ」、CABALLUM > caballu / cavallu 「馬」、IBI > ibi / ivi 「そこに」、RIVUM > ribu / rivu 「川」、UBE > ubi / ube / uve 「どこ」、VIVA > biba 「生きている」。これら 2 つの子音が俗ラテン語と同様、母音間において摩擦音 [β] で実現されるのであれば、歯音、軟口蓋音でも同様に *-<d>-* が [ð]、*-<g>-* が [ɣ] として実現されていたと考えるほうが、閉鎖音の体系的な変化という観点からすると、妥当であるといえる。また、先行研究においても、このような見かたを支持する記述がある；

“...the intervocalic /-b-/ came to be pronounced as a fricative rather than a stop. This pronunciation produced a merger of /-b-/ with the bilabial pronunciation of the older [-w-] > /-b-/. From this confusion of two phonemes we are led to wonder whether or not the other voiced occlusives were not similarly weakened in pronunciation. There being no other phonemes with which they might have been confused there would be no trace of this change in writing, because for Latin speakers a fricative pronunciation of /-d-/ or /-g-/ would alter nothing in the phonological system as did the weakening of /-b-/. Therefore they would not have been especially conscious of any change and would not have been tempted to make any changes in spelling.” (Lloyd *op.cit.* 141)

以上のような前提を踏まえて、ラテン語と古ログドローロ方言の母音間閉鎖音の音素と異音の状態を、弱化が生じない語頭と対比させて図示すると、それぞれ図 3, 4 のようになる；

(図 3) ラテン語

	語頭	母音間
/TT/		-[TT]-
/T/	[T]-	-[T]-
/D/	[D]-	-[D]- (-[Ð]-)

(図 4) 古ログドーロ方言

	語頭	母音間
/TT/		-[TT]-
/T/	[T]-	-[T]- (-[D]-)
/D/	[D]-	-[Ð]- (-ϕ-)

3. 3. 2 現代ログドーロ方言の母音間閉鎖音の体系

現代ログドーロ方言では、古ログドーロ方言でわずかながら見られた無声閉鎖音の有声化、有声閉鎖音の消失という変化が完了する。すなわち、本来の $-/T/-$ が $/D/$ に音韻化することによって、 $-/D/-$ の摩擦音化あるいは消失によって生じた空き間が埋められて、閉鎖音体系の再構築が行われたといえる。

現代ログドーロ方言の母音間閉鎖音の状態を、語頭と対比させて図示すると、図 5 のようになる；

(図 5) 現代ログドーロ方言

	語頭	母音間
/TT/		-[TT]-
/T/	[T]-	
/D/	[D]-	-[Ð]- (<-[D]- < -/T/-) -ϕ- (<-[Ð]- < -/D/-)

3. 3. 3 chain shift に基づく考察

本節では、3. 3 におけるここまでの考察を踏まえて、サルデーニャ語ログドーロ方言における母音間閉鎖音の弱化プロセスに、chain shift の枠組みを再び導入する。

3. 3. 1 および 3. 3. 2 で行った考察から、サルデーニャ語ログドーロ方言における母音間閉鎖音の弱化プロセスは、2. 2 で示した chain shift の枠組みに従ってとらえてみると、次の 2 つの段階に分けられる；

(I) 有声閉鎖音が摩擦音化する．(II) 本来の有声閉鎖音の位置に空き間が生じるので，無声閉鎖音が有声化する．このプロセスを図示すると，図 6 のようになる；

(図 6)

(I) D > [ɖ]
(II) T > D

図 6 からわかるように，サルデーニャ語ログドーロ方言における母音間閉鎖音の弱化プロセスは，drag chain の枠組みでとらえられる²²．ただし，一連の西ロマンス諸語の研究で提案されているような drag chain とは性質が異なることに注意しなければならない．すなわち，サルデーニャ語ログドーロ方言では無声閉鎖音が有声化した後の変化として，無声閉鎖重子音の単子音化が生じなかったという点で，西ロマンス諸語とは異なっている．換言すれば，サルデーニャ語ログドーロ方言では無声閉鎖重子音は閉鎖音体系の chain shift に関与していないと結論づけられる．

3. 3. 4 ヌーオロ方言からの傍証

本節では，ログドーロ方言の母音間閉鎖音の弱化プロセスが drag chain に基づいた変化であることの傍証となる論拠を，サルデーニャ語の方言の 1 つであるヌーオロ方言 (nuorese) の母音間閉鎖音の現われに基づいて述べる．

ヌーオロ方言は，サルデーニャ島中央部の東寄り，ヌーオロ (Nuoro)，ビットィ (Bitti)，ドルガリ (Dorgali) などでは話されている方言で，サルデーニャ語諸方言の中でも特にラテン語に近く，その特徴を保存している (cfr. Pittau 1972)．

²² 現代ログドーロ方言では，有声摩擦音は消失し，無声閉鎖音に由来する有声閉鎖音は摩擦音化するので，図 6 の変化に続いて，以下のような drag chain が生じたと考えられることもできる；

(III) [ɖ] > ϕ
(IV) D > [ɖ]

この変化では，スペイン語とは異なり，有声摩擦音の消失が有声閉鎖音の摩擦音化の引き金となっている．すなわち，消失という音変化も閉鎖音体系に関与しており，構造上の変化をもたらす要因となっている可能性を示唆するものといえる (cfr. 註 8)．

母音間閉鎖音についても、ラテン語にきわめて近い状態を保存しているヌーオロ方言では有声閉鎖音のみが弱化をこうむり、その結果有声摩擦音に変化した²³；

lat. -D- (-[Ð]-) > nuor. -[Ð]- (cfr. log.mod. -ϕ-):

CABALLUM > kaváḍḍu (káḍḍu) 「馬」, CAUDA > kòḍa (kòa) 「尾」, JUGUM > júyu (zú) 「くびき」.

lat. -T- > nuor. -T- (cfr. log.mod. -[Ð]-):

NEPOTEM > nepòte (neḅòḍe) 「おい/めい」, ROTA > ròta (ròḍa) 「車輪」, SECARE > sekáre (seyáre) 「切る」.

lat. -TT- > nuor. -TT- (cfr. log.mod. -TT-):

CUPPA > gúppu (kúppu) 「ワイン樽」, CATTUM > gáttu (gáttu) 「猫」, VACCA > vákka (bákka) 「牝牛」.

ヌーオロ方言の母音間閉鎖音の現われから、次のことがいえる；ログドーロ方言における母音間閉鎖音の弱化を、push chain によって説明しようとするのであれば、ヌーオロ方言において、連鎖的変化の最後の段階である有声閉鎖音の弱化のみが生じたことが説明できない。これに対して、drag chain による説明であれば、ヌーオロ方言は連鎖的変化の最初の段階である有声閉鎖音の弱化が生じた段階でほかの方言群から分岐し、それ以上の変化をこうむらなかったと考えることで、妥当な解釈を与えることが可能となる。

このように、ヌーオロ方言における母音間閉鎖音の現われは、ログドーロ方言の母音間閉鎖音の弱化プロセスを、drag chain によって説明しようとする本稿の主張を支持するものであるといえる²⁴.

²³ Wagner (1984: 136) はヌーオロ方言の母音間有声閉鎖音について、次のように述べている；“Oggi le occlusive sonore intervocaliche restano nei dialetti centrali come fricative.”

²⁴ 母音間閉鎖音の弱化のほかにも、ログドーロ方言では生じたが、ヌーオロ方言では生じなかった変化が存在する。例えば、ラテン語の子音連続 *rj* はヌーオロ方言では保存されているが、ログドーロ方言では *rdz* に変化した；lat. AREOLA > nuor. ariòla, log.mod. ardzòla 「麦打ち場」, lat. CORIUM > nuor. kóriu, log.mod. kórdzu 「革」。また、語頭の *v* はヌーオロ方言では保存されている一方、ログドーロ方言では *b* に変化した；lat. VITA > nuor. víta, log.mod. bíḍa 「生命」, lat. VACCA > nuor. vákka, log.mod. bákka 「牝牛」 (cfr. 註 16).

4 結論

本稿では、サルデーニャ語ログドーロ方言における母音間閉鎖音の弱化プロセスを、閉鎖音体系に生じた chain shift ととらえて考察を行った。chain shift の枠組みのもとで、ラテン語の母音間閉鎖音が古ログドーロ方言、および現代ログドーロ方言においてどのように現れるかを観察した。その結果、この方言における母音間閉鎖音の弱化プロセスは、drag chain の枠組みに基づいた変化であるという可能性を示した。drag chain の立場を支持する根拠として、CSNT の古ログドーロ方言において、母音間の -- と -<v>- が混同して表記されているという事実と、閉鎖音体系の通時的変化としては有声閉鎖音の摩擦音化のみが生じたヌーオロ方言の例を挙げた。

また、西ロマンス諸語とは異なり、無声閉鎖重子音は chain shift に関与しておらず、現代ログドーロ方言においても保存されていることを示した。このような無声閉鎖重子音のふるまいは、西ロマンス諸語には見られない重子音の特殊な性質を示唆するものであり、サルデーニャ語ログドーロ方言を顕著に特徴づける要素であるといえる。今後はサルデーニャ語の重子音のさらなる観察を通じて、その特徴を明らかにしていきたい。

略号一覧

ant. = 古 (antico), cong. = 接続法 (congiuntivo), fr. = フランス語 (francese), ger. = ジェルンディオ (gerundio), impf. = 未完了過去 (imperfetto), ind. = 直説法 (indicativo), inf. = 不定詞 (infinitivo), it. = イタリア語 (italiano), lat. = ラテン語 (latino), log. = ログドーロ方言 (logudorese), mod. = 現代 (moderno), nuor. = ヌーオロ方言 (nuorese), pf. = 完了 (perfetto), pl. = 複数 (plurale), pres. = 現在 (presente), sard. = サルデーニャ語 (sardo), sg. = 単数 (singolare), sp. = スペイン語 (spagnolo).

参考文献

- Alarcos Llorach, E. 1965⁴. *Fonología Española*. Madrid: Gredos.
- Atzori, M. T. 1953. *Glossario di sardo antico*. Parma: Scuola tipografica benedettina.
- Blasco Ferrer, E. 1984. *Storia linguistica della Sardegna*. Tübingen: Max Niemeyer.
- . 1994. *Ello Ellus. Grammatica della lingua sarda*. Nuoro: Poliedoro Edizioni.
- . 2003. *Crestomazia sarda dei primi secoli. volume primo. Testi - grammatica storica - glossario*. Nuoro: Ilisso Edizioni.
- Campbell, L. 2004². *Historical Linguistics*. Edinburgh: Edinburgh U. P.
- Lausberg, H. 1965. *Lingüística románica. tomo I. Fonética*. Madrid: Gredos.
- Lewis, C. T. and Short, C. 1975. *A Latin Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- Lloyd, P. M. 1987. *From Latin to Spanish*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- Martinet, A. 1964². *Économie des changements phonétiques*. Bern: Francke.
- Merci, P. 2001. *Il Condaghe di San Nicola di Trullas*. Nuoro: Ilisso Edizioni.
- Meyer-Lübke, W. 1992⁶. *Romanische etymologische Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
- Penny, R. 2002². *A History of the Spanish Language*. Cambridge U. P.

- Pittau, M. 1972². *Grammatica del sardo nuorese*. Bologna: Pàtron Editore.
- Väänänen, V. 1981³. *Introduction au latin vulgaire*. Paris: Klincksieck.
- Wagner, M. L. 1939-1940. „Über die neuen Ausgaben und die Sprache der altsardischen Urkundenbücher von S. Nicola di Trullas und S. Maria di Bonarcado.“ *Vox Romanica* IV. 233-269, V. 106-164. Bern.
- . 1960-1964. *Dizionario etimologico sardo*. Heidelberg: Carl Winter.
- . 1984. *Fonetica storica del sardo*. Cagliari: Gianni Trois.
- Wartburg, W. v. 1971². *La fragmentación lingüística de la Romania*. Madrid: Gredos.
- Weinrich, H. 1958. *Phonologische Studien zur romanischen Sprachgeschichte*. Münster: Aschendorff.
- 金澤 雄介 2006. 「サルデーニャ語における母音間閉鎖音の弱化について」 京都大学大学院文学研究科研究報告書.

La lenizione delle occlusive intervocaliche nel sardo logudorese

- dal punto di vista di una reazione a catena -

Yusuke KANAZAWA

Sommario

Nel mutamento diacronico del sardo logudorese è avvenuto il fenomeno della lenizione delle occlusive intervocaliche, che parimenti si verifica nelle lingue romanze occidentali.

In questo articolo, si considera il processo della lenizione delle occlusive intervocaliche dal latino al logudorese moderno, osservando come si presentano queste consonanti nel logudorese, sia antico che moderno. Per il logudorese antico si utilizza come documento il *Condaghe di San Nicola di Trullas* (CSNT). Quanto al metodo di indagine, s'introduce il concetto di reazione a catena per inquadrare il processo di lenizione delle occlusive intervocaliche.

In conclusione, viene mostrato come la lenizione delle occlusive intervocaliche nel sardo logudorese sia avvenuta sotto l'azione di un processo di "trazione a catena". Alla base di tale conclusione stanno sostanzialmente due fatti: (1) la confusione della lettera --intervocalica con <v>- nel logudorese antico; (2) il nuorese, dialetto parlato nel cuore della Sardegna, mostra la sola spirantizzazione delle occlusive sonore come cambiamento diacronico delle occlusive intervocaliche. Si dimostra, inoltre, che le occlusive sorde geminate nel sardo logudorese non partecipano a questa reazione a catena, visto che tali consonanti sono conservate. Con ciò, appare chiaro che la reazione a catena nel sardo logudorese differisce da quella che avviene nelle lingue romanze occidentali.

(受理日 2006年7月30日)